

横浜開港150年の歴史

— 港と税関 —



横浜税関

は じ め に

横浜港は、国内の他の主要な港のように江戸時代に上方を中心とした国内流通経済の一翼を担いながら発展してきたものではなく、幕末の開国騒ぎの中で、横浜という海辺の小さな村に、幕府によって唐突かつ人為的に、それもかなり強引なやり方で開設された港である。しかも出島時代の長崎とは異なり、貿易や通関の主導権を幕府ではなく外国の側に相当程度握られ、その1世紀半にわたる歴史の約3分の1を不平等条約の下でその重圧にあえぎながら過ごすことを余儀なくされた港である。

しかしいったん港が開かれると、横浜という地は我が国貿易の一大中心地となり、外国の文明が真っ先に流入する最先進の地となった。もとよりその道は平坦とばかりは限らず、数十年に及ぶ粘り強い交渉を経て不平等条約の撤廃にこぎつけた後も、恐慌、震災、戦火に見舞われるなど幾たびも壊滅的な打撃を蒙った。そのいずれの災厄をとっても、今日の私たちであれば到底耐え難いようなマグニチュードを持つものであった。しかし私たちの祖先や先輩諸氏はそうしたたび重なる災厄にもかかわらず、強靱な精神力をもって降りかかる厳しい試練に耐え抜き、横浜の地を、そしてこの横浜の港を見事に復活させ、今日の輝かしい繁栄をもたらしたのである。これは驚きを超えて、ほとんど奇跡と言ってもよいぐらいのものである。

当横浜税関も横浜の開港以来の長い栄光と苦難の歴史を港と共に歩んできた。かつては新港埠頭を建設するなど、港づくりの面で中心的な役割を果たしたこともあった。税関の仕事は貿易の発達段階やそれぞれの時代背景に応じて幾多の変遷を重ねてきたが、いつの時代にも税関は横浜港と運命共同体の関係にあった。そしてそのことは、今日においてもなお変わってはいない。

ここでは、そうした横浜港の発展と横浜税関の歴史を開港当時にまで遡って振り返ってみたい。先人の苦労の跡を辿ることを通じて私たちは現在の私たちのあり方をより客観的にとらえることができるし、そうした客観化を通じてこそ私たちは将来のあるべき姿についての洞察を得ることもできる。歴史を学ぶことは単に過去を懐しむという以上の意味を有するのである。そうした意味で、本冊子がこれを手にする方々にとって将来の横浜港のあり方を考えるうえでの何がしかの御参考になることを心から願う次第である。

ところで、本冊子は昨年5月に発行した「横浜港の発展と税関の歴史」を大幅に加筆修正したうえで、タイトルも開港150周年にちなんで表題のように改めたものである。内容については、港湾に何らかの形で関わっておられる方々を念頭に置いて、港と税関に関わる事柄をなるべく広くカバーするよう努めたが、逆にその分、一般の方々にはなかなか御理解いただきにくい箇所も随所にあると思われる。御寛恕を乞うほかないが、せめて第1章、第2章の主要箇所だけでも御一瞥いただければと思う。

本冊子の作成と今般の改訂にあたっては、横浜税関の調査統計課及び企画調整室の諸君の力に負うところが大きかった。彼らの協力と貢献がなければそもそもこの冊子をこういう形で世に出すことはできなかつたであろう。また執筆にあたっては、「税関百年史」「横浜税関百二十年史」をはじめ、数多くの文献を参考にさせていただいた。調査統計課及び企画調整室の諸君の労をねぎらうとともに、大変貴重な文献を執筆された諸賢・諸先生方に対し、ここに心から感謝の念と敬意を表することとしたい。なお、本冊子の内容については、十分に吟味をしたつもりではあるが、なお思い違いによる誤りや調査不足の点が多々あるかもしれない。読者の皆様のご叱正を乞う次第である。

(本冊子の文中、意見にわたる部分は執筆者の個人的見解にすぎないことをあらかじめお断りしておく。)

平成19年7月

横 浜 税 関 長
谷 川 浩 道

三訂版の発行に寄せて

昨年7月に改訂版を発行して以来、丁度1年が経過した。今回の改訂においては、その後の関税政策の変化をフォローするとともに、過去の歴史についても、浅野総一郎、有吉忠一といった横浜港の歴史に大きな足跡を残した人物の業績を新たに記述の対象に加えるなどの加筆修正を行った。横浜開港150周年を目前に控え、本冊子が何らかの形で皆様のお役に立てれば幸いである。

平成20年7月

横 浜 税 関 長

谷 川 浩 道

目 次

第 1 章 ゼロからの出発と対外不平等の半世紀

第 1 節	安政の五か国条約	1
(1)	条約の締結	1
(2)	ハリスとの交渉経緯	1
(3)	貿易に関する取決め	3
第 2 節	横浜港の開港と神奈川運上所の設置	4
(1)	横浜開港の経緯	4
(2)	横浜開港場の建設と神奈川運上所の設置	6
第 3 節	開港後の貿易と経済	8
(1)	国内経済への影響	8
(2)	五品江戸廻送令	10
(3)	幕末動乱の中での対外譲許	11
(4)	明治期の貿易・経済	11
第 4 節	開港当時の神奈川運上所の業務	12
(1)	入出港時の業務	12
(2)	初期の通関手続	13
(3)	保税制度の萌芽(借庫制度)	15
(4)	臨時開庁制度の始まり	15
(5)	明治政府の成立と税関	16
第 5 節	対等な貿易取引を求める横浜商人の動き	17
(1)	貿易取引の形態	17
(2)	初期の外国商人	19
(3)	横浜商人の団結	20
(4)	横浜生糸検査所の設立	22
第 6 節	港湾関係業務の発展	23
(1)	貿易業	23
(2)	海運業	23
(3)	貿易金融業	24
(4)	倉庫業	24
第 7 節	関税自主権の回復と近代的税関制度の確立	25
(1)	関税自主権回復のための努力	25
(2)	関税関連法規の整備	25
(3)	適正通関確保へ向けての前進	26
(4)	保税制度の確立	26
第 8 節	象の鼻と新港埠頭	28
(1)	鉄栈橋と象の鼻地区の整備	28
(2)	新港埠頭の整備	29

第2章 京浜工業地帯の発展と相次ぐ試練の半世紀

第1節	資本主義の発達と動揺	34
(1)	京浜工業地帯の誕生	34
(2)	第一次世界大戦と戦後恐慌	36
第2節	関東大震災とその深刻な後遺症	38
(1)	関東大震災の発生	38
(2)	神戸港の発展と鈴木商店	40
(3)	昭和金融恐慌	41
(4)	世界恐慌と日中戦争・太平洋戦争への突入	42
(5)	生糸の地盤沈下と近代工業の発展	43
(6)	東京港の開港と京浜港の誕生	44
第3節	港湾行政の一元化とその後の税関史	45
(1)	港湾行政の一元化	45
(2)	戦時統制下の貿易と税関	45
(3)	税関の再開	45
(4)	東京税関の独立	46
第4節	戦災と大規模接収	46
(1)	空襲により焦土と化した横浜	46
(2)	米軍による大規模接収	47
第5節	戦後復興と港湾管理者問題	50
(1)	戦後の復興期	50
(2)	港湾法の制定と港湾管理者問題	51

第3章 戦後高度成長と近年における国際化の進展

第1節	戦後の我が国経済と貿易	55
(1)	高度成長期の産業	55
(2)	コンテナ船時代の到来と埠頭の整備	55
(3)	ニクソン・ショック、石油危機と高度成長の終焉	56
(4)	プラザ合意と前川レポート	57
第2節	戦後の横浜の経済と貿易	59
(1)	高度成長期以降の横浜港及びその周辺の状況	59
(2)	横浜港の主要貿易品目の変遷	61
(3)	横浜港の主要貿易相手国の変遷	63
(4)	横浜港の国際競争力とスーパー中枢港湾	64
第3節	戦後の関税政策と税関行政	65
(1)	関税法規の近代化	65
(2)	多角的貿易交渉の進展と自由貿易協定・経済連携協定	65

(3) 戦後の密輸取締りと適正通関の確保	69
(4) 国際物流の進展に伴う通関手続の迅速化	72
(5) 保税行政の効率化	75
(6) 適正かつ公平な課税の実現	76
(7) 新たな政策課題への対応	78
おわりに	90

編 著 者 : 谷川 浩道

編集協力者 : 安部 勝
(五十音順) 大橋 洋一
大淵 達夫
菊池 正二
木原 尚子
桜井 和仁
佐藤 俊幸
下村 静
白井 佑
白川 努
関 幸恵
高見 和宏
田汲 直貴
長谷川 利幸
松野 史利
柳岡 順子
山内 正智
米山 丘